

## 宗兵衛と弟子たち（三輪）

下田中村に宗兵衛という少年がいました。お寺へよく行き、お尚さんの話を大人に混じって聞いていました。

お尚さんは、宗兵衛が物覚えがよいし、これは見込みがあると思つて、学問をすることを勧めました。

宗兵衛は熱心に学び、よく覚えていきました。

ある日寺から帰つてくると、お尚さんから大坂に出て陽明学という学問を修めたらどうかと勧められたと父親に話しました。すると父親は大坂の親類に頼んで学問ができるようにしてくれました。

陽明学とは、知ることと行なうことが一致するように学ぶ学問であり、それを学ぶ者が増えてきました。京都へも行き、数学や心学<sup>しんがく</sup>の勉強もしました。

そんな折、父親が亡くなったという知らせが入りました。そこで、下田中村へ帰つてきて、家を継ぎました。

そのころ元奉行の隠居さんが、村人を集めて俚約や婦女の心得を説いていました。それをまとめて「銘言」という本にしたのですが、村人には難しすぎたり、間違つていた

りしているのです。

そこで宗兵衛は、物事の捉え方の筋道を説いた木版刷りの「銘言細理解」という本を作りました。

その本は人としての道を説き、よい生き方を勧め、思いやる心を述べています。「治めるといふことは主君のためではなく、領民のためにある」という考え方も含まれていました。

やがて彼の考えが周りの人に影響を与え、村で問題が出てくると、彼に相談に来るようになりました。学問を習いに来る人もいて、いつしか塾になっていきました。

ある時、家の近くまで帰つてくると、侍が大きな声でどなりつけているのです。何事かとその先を見ると、若い男がふるえて小さくなっていました。

「ちよつと待ちなされ。」

と宗兵衛が声をかけましたが、侍はやめようとしません。

「この若い二人が何かしましたか。」

「昼間からふざけたことを……。」

「逆らわないものを痛めつけて、なんになります。」

「懲らしめねばならん。」

「弱い者いじめになりますぞ。」



「もうよい。われわれは帰る。」

一つ間違えれば刀をふり上げられます。宗兵衛の勇氣に

よって若者は救われたのです。

この話は評判となって広まり、彼の名前がいつそうよく

知られるようになりました。

明治二年、七月になつても六甲山に雪が降るなど気温が上がらず、冷害となりました。その上、前の年は洪水で不作。打ち続く災害にもかかわらず、年貢はそのままでたつたのです。ますます取り立てが厳しくなってきました。

宗兵衛の塾では、下田中の市右衛門や貴志の吉右衛門、川除の栄蔵、市松などの門弟がいました。門弟の中には米の仲買をしている者がいて、人々が食べるものに事欠く様子や困り果てている様子が手に取るように分かつたのです。

「学問をすることは、暮らしとかけ離れたことではない。物事の道理を突き詰めることである。」と考える宗兵衛は人々の困窮に目をつぶることはできません。救済していただくことをお願いしようと考えました。

各村からも庄屋を通して「米を貸してほしい」とか「年貢を減らしてほしい」などとお願ひしましたが、藩役人は取り合つてくれません。

そのころ藩は経済的に追いつめられていて、百姓の窮状に目を向けようとはしなかつたのです。取り立てはいつそ

う厳しく、生活は日に日に苦しくなってきました。

門弟たちは「藩と話し合いができるのは宗兵衛先生をおいで他にはいない。先生と生死を共にしよう。」と覚悟を決めました。宗兵衛もこれ以上黙って見ているわけにはいかないと腹をくくりました。お互いを信じ合い、支え合う仲間でした。

吉右衛門は達筆だったので、書き役をしました。

「嘆願は聞き入れられませんでした。餓死を待つより、みんなの力を合わせてお願いしよう。」

明治二年十一月、弟子たちは書状を持って各村へ向かいました。知らせを受けた各村から、人びとが集まってきました。竹ぼらを吹き鳴らし、手に手に鋤や鋤を持ち、隊列を組み、進むほどにその数が増えていきました。上野が原に到着した時には、実に多くの人たちが結集していました。

「人命を傷つけない。一品たりとも持ち帰らない。」などの指示が出されて、藩役所へと向かいました。みんなの力を背景にして要望書を提出しました。

みんなの思いが回答を出させました。年貢は平年の五分とする、年貢以外の米を取らないなど要望の多くは聞き入れられたのです。

しかし、大勢での決起は百姓一揆です。時代が変わりつ

つあったとは言え、一揆を起こしたものは極刑です。先頭に立った人たちが次々に捕らえられていきましたが、宗兵衛は家において指図をしていたので、捕らえられませんでした。

藩役人は誰が責任者なのか口を割らそうとしました。厳しい取り調べになりました。拷問のうめき声が聞こえてくると聞いて、宗兵衛はたまりかねて自ら出頭しました。

「私に全責任がある。他の者は釈放してほしい。」と願い出しましたが、聞き入れられませんでした。

宗兵衛は一揆を起こしたとして処刑されました。捕らえられた人たちも、それぞれ刑に服しました。

宗兵衛は、学問を深めるにつれて世の中のあり方を考え、人としての道を大切にしていったのです。そして、大勢の百姓の苦しみを救うために、自らの命をかけたのです。

宗兵衛の生き方は多くの弟子の心を動かし、今も語り継がれていると言うことです。

※心学：心を修用するための学問

(参考文献) 『三田市史』第六卷 近代資料編Ⅱ